ベトナムの風に吹かれて30年 ――母と生きた軌跡と『自分にしかできないこと』

法律事務所から日越の懸け橋へ ――小松みゆきさんが繋いだ家族と歴史の絆



写真左から加納弁護士、板倉事務員、小松さん、泉澤弁護士、荒井弁護士



何故ベトナムへ？

小松さんは、1947年、現在の新潟県魚沼市に生まれ、15歳で上京しました。1974年に東京合同法律事務所に事務員として入所し、1992年、40代半ばの小松さんは、かつてのベトナムハノイ日本語教師として単身渡りました。当初は2年の予定でしたが、現地の温かな人々に支えられ、国営放送局VOV（ベトナムの声）での勤務など30年に渡りベトナムで生活しました。

泉澤　何故ベトナムに行かれたのですか？

小松　私も15歳までの田舎の暮らしは山から焚きつけ取ってくるような生活で、母に連れられて卒業式の日の夜に東京に出て、それから日本の高度経済成長をずっと見ていました。その後75年のサイゴン陥落で、これからベトナムという国が始まるということを実感したんです。世の中のことも勉強したいし、これから国ができるというところに行くと、うどバラレルな感じなんですね。

荒井　ベトナムの経済発展はすごいよね。30年間ベトナムに居て、毎日変わっていく様子を見ていてどうでした？

小松　もともとがあまりにも（経済が）低過ぎたんですよね。（敵を）石器時代にしてやるって最近まで大統領が言っていますが、アメリカ空軍のルメイ将軍が北ベトナムを石器時代にしてやると言ったのがもとです。ベトナム人にその当時のことを聞いたら、冗談的に、もともと石器時代のような生活しているから、これ以上悪いことになることはないだろう、って言っていました。マッチやライターが無くても（火打ち石で）こうやればゼロから火がつくんだみたいな話から始まる。私がいた90年代もモノ不足で大変。これ以上悪くならないでしょうって。あとは物が増えるだけだという感じ。

加納　たくましいですよね。

母親の介護

2001年父親の他界後、認知症の母親の介護問題に直面します。親戚にも厄介者扱いされ居場所のなくなった母親を、小松さんは周囲の反対を押し切り、ハノイへ呼び寄せました。ベトナムの敬老精神や「おせっかい」な地域文化の中で、2014年に94歳で他界するまで13年間、母親（著書では「Baちゃん」）は日本にいた頃より明るさを取り戻し元気に過ごしました。

加納　ベトナムでの介護って具体的にどういうふうに手配されたんでしょうか。

小松　父が亡くなり、居場所のなくなった認知症の母をベトナムに連れてきたとき、ベトナムには老人ホームも何もなかった。私も認知症はわからないし、仕事に行かなきゃならない。人間ギリギリになると何をするかというと、誰かに頼むんですね。地域研究とかで親子とかを拠点にベトナムの山岳地方に行く日本人留学生がいたんですよ。名簿をつくって、何曜日は誰さんにお願い…と。

荒井　当番制だね。

小松　そうです。午前中、午後誰、お昼食べさせてくれる人誰、夕食誰って全部つくったら